

日本人の対人不安発生プロセスの検討 —文化的自己観の影響—

The effect of Cultural Views of Self on Social anxiety processes:
—The case of Japanese undergraduate students—

薄井 瑛理香
Erika Usui

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード : 対人不安, 文化的自己観, 自己呈示,
Key words : Social anxiety, Cultural Views, Self-presentations

1. 研究目的

青年期に多い問題の1つとして対人不安が挙げられる。対人不安とは、「現実のあるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予想したりすることから生じる不安状態」と定義されている (Schlenker & Leary, 1982)。

対人不安の発生過程について、Leary(1983)の対人不安の自己呈示理論では、『「特定の他者に印象を与えようと動機付けられている」が、「そうできるか疑わしい」時に対人不安が生じる』というもので、Leary はこれを $SA=[M \times (1-p)]$ 、【SA=対人不安のレベル、M=特定の印象を与えようとする動機付けのレベル、p=個人の望む印象を作れるかどうかの主観的確率】という式で表している。つまり、自己呈示に対する動機付けが高く、自己呈示の主観的成功確率が低い時に対人不安が高まるとされる。

本研究では、この自己呈示の動機付けの高さが文化的自己観の影響を強く受けると考え、文化的自己観から自己呈示の動機付けを介して対人不安が生じるというプロセスモデルを仮定し検証することを目的とした。

本研究で注目する文化的自己観とは、北山(1994)が提唱した概念で、「ある文化において歴史的に共有されている自己についての前提」と定義され、文化的自己観は、相互独立的自己観と相互協調的自己観とに分けられる。西欧、特に北米中流階級の文化における自己観は、他から切り離され独立したものという信念に基づく、相互独立的自己観とされている(北山, 1994)。一方で、日本を初めと

する東洋の文化における自己観とは、他と根源的に結び付いているという前提に基づいており相互協調的自己観だとされている(北山, 1994)。実際に高田(1999)は、アメリカ人、オーストラリア人、アジア系、日本人の4群で相互独立性と相互協調性について比較しているが、日本人青年は西欧人青年に比べて相互独立性が低く、相互協調性が高いことを示している。

本研究では、青年期の日本人に強くなると示唆される(高田, 1999)相互協調的自己観に注目し、文化的自己観と自己呈示が日本人青年の対人不安に重要な要因として影響を及ぼしている可能性を考えている。そこで、本研究ではLeary(1983)の対人不安の自己呈示モデルを基に、日本人特有の対人不安発生のプロセスを質問紙調査により実証的に検討する事を目的とした。

2. 予備調査

予備調査の目的は、本研究の仮説モデルを検証するために、文化的自己観と自己呈示の動機付けを測定する尺度の検証であった。

文化的自己観の測定には木内(1995)の独立・相互協調的自己観尺度を使用した。相反する概念として二者択一的に[A-a-b-B]という回答方法であったが、本研究では仮説モデルの検証のため相互独立的自己観・相互協調的自己観の程度をそれぞれ測定する必要があることから尺度項目を変更した。

Leary(1983)の対人不安の自己呈示モデルの「特定の印象を与えようとする動機付けのレベル(M)」を小島・太田・菅原(2003)の賞賛獲得・拒否回避欲

求尺度を用いることとしたが、調査対象となる大学生に配慮し日常生活で使用する慣用語へと一部変更した。

予備調査は、都内大学に通う大学生・大学院生 84 名を対象とし、2016 年 6 月 24・27 日、7 月 1 日に集合調査形式で個別自記入式の質問紙調査を実施した。有効回答票は 70 票であり有効回答率は 95.9%であった。文化的自己観を測定する相互独立・相互協調的自己観尺度 32 項目について因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った結果、第 1 因子が「相互独立的自己観 ($\alpha=.85$)」、第 2 因子が「相互協調的自己観 ($\alpha=.84$)」となり、因子の妥当性と内的整合性は概ね確認された。同様に、賞賛獲得・拒否回避欲求尺度 18 項目について因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った結果、第 1 因子は「拒否回避欲求 ($\alpha=.85$)」、第 2 因子は「賞賛各地奥欲求 ($\alpha=.85$)」となり、内的整合性が確認された。

3. 本調査

(1) 方法

2016 年 10 月 25・28 日に都内大学に通う大学生 276 名を対象に個別自記入式の集合調査を実施した。質問紙の構成は以下の通りであった。①表紙、②文化的自己観を測定するもの：相互独立・相互協調的自己観尺度(予備調査で確認された木内(1995)の改訂版) 13 項目、4 件法、③動機づけのレベルを測定するもの：賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度(予備調査で確認された小島・太田・菅原(2003)の改訂版) 13 項目、5 件法、④主観的自己呈

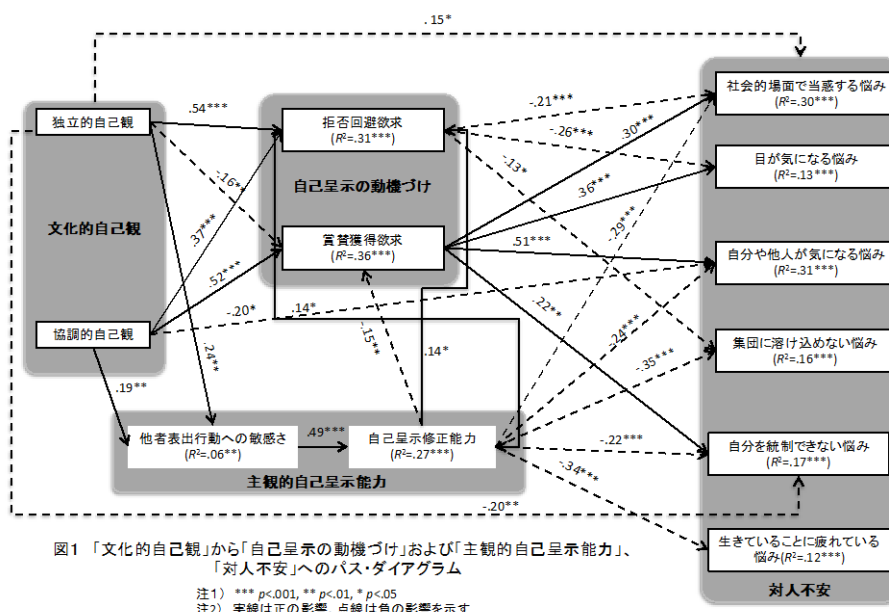
示能力を測定するもの：セルフ・モニタリング尺度(小口, 1995;八城・小口, 2003) 13 項目、5 件法⑤対人不安を測定するもの：対人恐怖心性尺度(堀井・小川, 1996) 30 項目、7 件法。

(2) 結果と考察

有効回答票は 247 票であり有効回答率は 85.2%であった。各尺度について確認的因子分析および信頼性分析(α 係数)を行い、因子の妥当性と信頼性が確認された。調査対象者の文化的自己観の平均値は、相互協調的自己観($M=16.4, SD=2.82$)が相互独立的自己観($M=14.5, SD=3.12$)に比べて 1%水準で有意に高かった($t(244)=6.15, p<.001$)。

対人不安が発生する諸要因の関係を明らかにするため、仮説モデルに基づき、パス解析を行った。解析はステップワイズ法による繰り返しの重回帰分析を用いてパスダイアグラムを作成した(図 1)。

その結果、Leary の対人不安の自己呈示理論と同様のモデルが確認された。文化的自己観のうち協調的自己観が自己呈示の動機付けにあたる拒否回避欲求・賞賛獲得欲求、主観的自己呈示能力にあたる他者表出への敏感さに影響を与えていることが明らかとなった。協調的自己観が高く、賞賛獲得欲求が高い人ほど対人不安に影響を与えていることが判明した。これは集団成員から認められ宇事が重要であると考えており、そのために集団から認められる振る舞いをしようとするほど対人不安が高まると思われた。



主要参考文献

北山 忍 (1994). 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, 10(3), 154-167.

Schlenker, Barry R.; Leary, Mark R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A *conceptualization Model Psychological*

Bulletin, 92(3), 641-669.

高田 利武 (1999) 日本文化における相互協調性・相互協調性の発達過程—比較文化的・横断的資料による実証的検討— 教育心理学研究, 49, 480-48